

神奈川

江戸より三番目の宿

東海道五十三次

神奈川宿は、神奈川湊をもつ宿駅として、その役割を果たしてきたのが、安政六年（一八五九）の横浜開港にさきだて、神奈川を開港場にすべしと要求する諸外国との国際外交の舞台となった。



▲ここはアメリカ領事館跡で、往時をしのぼせる。

宿内の寺院は諸外国の公館として利用され、さらには海面には台場が築かれ、外国侵攻の防衛の役割も課された。



本覚寺から青木橋交差点を撮る。



玄重の絵の場所台町は「名物のうまいもの」現在マニマニが立ち並ぶ住居地となっている。浦島伝説にちなんでカメを総と同意点で営業する料亭がある。坂道の片端が落ち込んだ地形がかつて海にせり出した崖であったことを思ゆせておもしろい。

かたじけなく素朴な味わいの瓦せんべい。むかしは茶屋の軒先で職人が焼いていた。宮前商店街内の稲葉子屋。浦志満が「元祖 亀の甲せんべい」の看板を引継いでいる。